



情報リテラシーと国際理解 —マラウイ共和国を訪れて感じたこと—

広島県広島学院中学・高等学校 担当教科：理科(化学・生物)、総合科 菱口 公喜

◆実践① 教科:地理・歴史・総合科 課外活動 ◆時間数:11時間 ◆対象学年:中学2年・3年 ◆対象人数:192人(中2)、186人(中3)
◆実践② 課外活動 ◆時間数:2時間 ◆高校3年 ◆対象人数:159人

実践① 中学生対象

ココがすばらしい!

一つの事象に対し、与えられた情報によって様々なとらえ方ができること、情報に惑わされない目を養う大切さを伝えた。

◆実践の目的

- 生徒の発展途上国に対する理解を助ける。
- 国際理解と国際協力の現場での取り組みを紹介する。
- 自分自身の体験から、国際理解・国際協力の取り組みの構造や問題点を指摘する。
- 国際協力実践の一環として、募金活動に参加する。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	世界の中で日本はどのように見られているだろうか	・ 歴史の授業を振り返り、現在の日本の特徴や外交政策をまとめる	・ 図説日本史 ・ 日本史のアーカイブ(資料集)
	世界の中のアフリカの国々の位置や特徴を調べよう	・ アフリカの国々を地図・地形図・民族分布図などを年代で比較する ・ 時代により変化する国境線との関係を調べる	・ 地理図説 ・ 世界の歴史資料集 ・ 最新世界史図表 ・ 新編地理資料 2009
2 ▼ 3	他者のために生きる人々について知ろう	・ 献身的に他者のために生きた人の人生について考える	・ 映画DVD 「マザーテレサ」 「ガンジー」 ・ マラウイスライドショー ※資料1
4 ▼ 5	アンダーstandの意味を再考しよう	・ 実際に他国で献身的に働く人の話を聞く「青年海外協力隊OBによる体験談」 ・ イエズス会士の講演	
6 ▼ 11	国際協力の構造を理解しよう	・ マラウイ等に関する講演 ・ コミュニケーション手段としての英語教育の重要性について ・ パネルディスカッション・募金活動の実施	

1 時限目

- ①世界の中で日本はどのように見られているだろうか
- ②世界の中でアフリカの国々の位置や特徴を調べよう

世界の国々にはそれぞれ特徴があり、そのことが国と国の関係の上で大切になる。特にアフリカの国々は植民地であった過去が現在にどのような影響を残しているか、この事実を理解したうえで国際援助について考察を促すことを目的とし、本授業の導入として歴史的アプローチを用いた。

1 限目その1 「世界の中で日本はどのように見られているだろうか」

歴史の時間に以下のテーマで授業を実施した。

1. 第二次世界大戦の敗戦後の外交
2. 高度成長
3. 国際貢献

生徒にとって第二次世界大戦の敗戦国であることや外交の問題は全くと言って良い程「他人事」との印象であった。その後の高度経済成長も歴史の一部でしかない。

日本の国際貢献はニュース等で取り上げられる機会も多く、知識として知ってはいるが、違う世界の出来事との捉え方が主流であった。

1 限目その2 「世界の中でアフリカの国々の位置や特徴を調べよう」

地理の時間に各テーマで授業

1. アフリカという捉え方の良い点、悪い点を考えてみよう。
2. 民族分布と国境についての地理的授業。
3. 植民地について

生徒は資料集の充実もあって、知識としての理解は比較的容易であった。しかし、民族という言葉は知っているが、概念は持っていないので、民族の対立や宗教のこと、国境線については机上の知識としてしか理解できない。理解するとはどういうことかを考えさせるために、隣の席の生徒の理解はどれくらいかと発問したところ、結構反響があった。情報の偏りや不確実な面について再認識できた。

生徒の反応から

- 民族を人種のことと思っている生徒がほとんどだった。
- イスラム教は過激な宗教だと決めつけている生徒が多かった。
- すべての国境は有刺鉄線で封鎖されていると思っている生徒が多かった。
- 生徒の隣国に対する評価は厳しい。
- テレビなどのマスメディアの情報については疑問を持たない。

2・3時限目 「他者のために生きる人々について知ろう」

- ・映画「マザーテレサ」「ガンジー」の鑑賞

高校生なら「ホテルルワンダ」や「ブラッドダイヤモンド」などの社会派映画の鑑賞が可能だろうが、中学生には伝記物が理解しやすいことから、上記2つを選択した。

鑑賞を終えた生徒は、暴力を用いない平和的な解決や献身には、大変な忍耐力と犠牲的精神が必要なことを感じたようだ。

4・5時限目 「アンダーstandの意味を再考しよう」

- ・イエズス会士の講演

特攻隊戦士が敗戦からイエズス会に入会し、神父となり単身ネパールに乗り込み障害児のための施設を作らせた。その壮絶な人生を本人の生の声で聞いた。

生徒の反応から

国際協力や他者のための献身が、決して絵空事ではなく、自分もそのような手伝いができるという可能性を心の中に持ったようだ。決して他人事ではあり得ないという体験が大事。そのためには身近な人の体験談は必要不可欠である。

6~11時限目 「国際協力の構造を理解しよう」

マラウイの現状について講演

資料はマラウイスライド(写真を大きく映したもの)を使用した。
マラウイやアフリカの貧しい地域で見聞きしてきたことを、情報として伝達した。

マラウイを語る時、最貧国という言葉が使われる。一日の生活費200円以下とも言われている。その最貧国は、前のアフリカ大旱魃のときは多くの難民を迎えたという。最貧国がさらに難民を受け入れるということは、逃げてきたほうも、受け入れたほうも大変な難儀をしたのではないと思われる。難民は、命だけを持って逃げてきた人々で、お金を使ってくれる観光客ではない。私が訪れた難民キャンプでは穀物はアメリカやオーストラリアと大きく書かれた袋に入っており、住居のトタンにもUSAと書いてあった。しかし、その輸送費はすべて日本がまかなっている。マラウイでのキャッサバ畑にも「アメリカ大使の特別な援助によりこの農園は設立された」と大きく書いてあった。しかし、そこで献身的に農業指導を行っているのは日本の青年海外協力隊だった。見える貢献と、見えにくい貢献の両方を理解するためには、実際に体験した人に話を聞くべきである。情報は必ずその伝達者の主観が入る。「多い」とか「少ない」、「こう言われている」という表現にはとくに注意すべきである。

さて、マラウイは最貧国の一つにして陸封国。資源もほとんどなく農業以外に産業はない。南アフリカへの出稼ぎと引き換えにエイズの流行が深刻で罹患率は10%を超える。マラリアや眠り病の被害も深刻で、平均寿命は30歳代。こういう解説を聞きながら見るボロをまとい座り込む子供の写真は、悲壮感や厭世感を与える。

しかし、現地で寝起きを共にする青年海外協力隊員の話では「着替えるという習慣自体が我々のサイクルと異なる」、「日本人が来るというので早くから待っているため疲れて座り込んだ」というのが真相らしく、その話を聞くと写真の見え方はずいぶん変わってくる。

相手を理解して、相手の力量や人間性を理解してこそ、有用な協力や援助ができるのだということに力点を置いて説明した。

生徒の反応から

非日常体験は好奇心旺盛な生徒にとって大変刺激になるようで、全く退屈することなく時間を過ごしたとの声が聞かれた。講演では特に、相手を理解し、その力量や人間性を理解してこそ、有用な協力や援助ができるのだということに力点を置いて説明したが、その点は広く理解されたようだ。

○実践活動としての募金への参加

以上のような事前学習を経て、中学2年生は広島市の中心部にて、12月18日・20日の両日10時から4時までの時間帯に交代で街頭募金を行った。募金の一部はアフリカの援助に向けられる旨写真を使って道行く人に説明して募金を呼びかけた。寒波が押し寄せ小雪舞う厳しい環境だったが、生徒は忍耐強く頑張った。

生徒の感想には、「寒くて手が冷たかったが、寒いのに御苦労様と言ってお金を入れてくださる方がいて嬉しかった」、「ヤンキーの怖そうな人がお金を入れてくれて、見る目が変わった」、「おばあさんの人が入れてくれると何か申し訳ない気がした」などというものがあった。

募金活動は、学校行事として中2で行なっているが、知識だけでなく体を使つての活動で得られるものは計り知れない。

<所感>

弱者に対して無関心ではいけないという教育理念の顕現化のプロセスで、弱者の中に世界的な社会構造の歪みの結果としてアフリカの国への援助を新たに盛り込んでいる国際援助の一側面が見えた。

自国のことを知ることも重要だが、今回の派遣中には諸外国の外交政策の一環を感じる場面が多々あった。太平洋戦争の反省からか日本の外交は国益より倫理的正義を掲げ実行している場面が多いように感じた。経済的にそれができる間は良いが、果たしてそれがいつまで続くかということは疑問であり、自国の経済が危うい時に最初にカットされるのは他国への援助ということにもなるだろう。そのバランスの難しさを感じることもあり、その点も併せて伝えた。

実践② 高校生対象

◆実践の目的

国際理解をよりマクロの視点で捉え、今自分たちにできることは何かを実感を持って考えさせる。
環境教育・エネルギー教育の一環として地球規模での物流や物価を考え、エネルギー対価で先進国と途上国の現状を考える。

授業の構成

テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1.日本の歴史を振り返り、国際関係 中での日本の位置を考える 2.日本の国際協力についての現状を 知る	講演形式	
3.アフリカの地理的状況や社会的現 状について理解を深める 4.アフリカの国々が置かれている国 際的な状況を理解する	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 先行知識を確認したのち写真を見せ、その印象や 気付きについて意見交換する ▶ 先行知識に対し、現地での情報収集や聴取した知 識を重ねあわせる ▶ 先行知識が先入観になり偏見や差別、誤った理解 につながる危険性のあることを認識する ▶ 特に異文化・異風習には現地での体験を十分に考 察することが必要であることを認識する 	パワーポイント 「マラウイ・プレ ゼンテーション」 ※資料1 写真
5.経済社会における石油エネルギー の位置づけを生活体験から実感する	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 「歩く」をエネルギー的側面から理解する ▶ 呼吸の化学反応式から得られる化学的情報を整理 する ▶ エネルギーの側面から石油エネルギーが安価過ぎ 先進国の経済や文化はその上に成り立っているこ とを理解する 	パワーポイント 「歩くマラウイ」
6.情報リテラシーと国際理解 について	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 国際関係を良好に保つために働く日本人の姿を伝 える ▶ 人を幸せにしたいという思いと実践のギャップに ついて考える ▶ 上から目線の安易な援助とは何か、ディベートを 行う 	

授業の詳細

主にパワーポイントを使用し、講演形式で実施した。



▶ 写真が与える情報について考える



▶ 生徒の反応は先行知識によって変化する



▶ パワーポイントによる情報リテラシーの講演

歩くことを含めて我々の生物としてのエネルギー消費は炭水化物を酸化するという基本的な化学反応式で表すことができる。



このとき、グルコース(C₆H₁₂O₆)180gあたり約700kcalのエネルギーが蓄積される。

では、700kcalとはどれくらいのエネルギーかということ、60kgの体重の人が普通で3時間半歩けるエネルギーである(基礎代謝を除く)。しかるにバスや電車は3時間半もあれば200kmほども移動できるし、歩くのと同じ距離なら15分もあればついてしまう。

都市生活は安価なエネルギーの上に人類史上かつてない利便性を構築したが、そのことと幸せを単純に比較することにためらいを感じる。マラウイの人々の生活は身の丈にあった合理的なもので、彼ら自身が幸せと感じているかどうかは別にして、先進諸国の生活の反省を促がすに十分なものであった。

<p>歩く</p> <p>エネルギーについて考える</p>	<p>歩くといえは</p> <ul style="list-style-type: none"> • 何分歩けるか? • どれだけの距離なら歩けるか? • どれくらい荷物を運べるか? • 歩くことによるエネルギーの消費量は? 	<p>何分歩けるか?</p> <ul style="list-style-type: none"> • 100円、庶民等に使うこと、バスに乗ることを比較して、何分まで歩くと歩く方を選ぶか? • ...30分! • 30分を過ぎると時間の無駄であると感じ、飲食等に優先して移動にお金を使う。 • 2kmから3kmくらいである。 	
<p>労働対価</p> <ul style="list-style-type: none"> • 時給という労働対価による比較 • 歩くことは労働の前編となるのか? • 700円/時間で考えると、1kmあたり150円くらいの価値があると考えられる。 • 広島市内電車は150円で終点まで行ける 	<p>呼吸とエネルギー</p> <ul style="list-style-type: none"> • 呼吸はグルコースの酸化 • 180gのグルコースを酸化すると発熱とともに300kcal(70kj)のエネルギーが蓄積 • 70kgの人が1時間歩くエネルギー(およそ4km強) 	<p>エネルギー対価</p> <ul style="list-style-type: none"> • 70kgの大人を自動車は1時間で50km以上も移動させることができる。 • 宅配だど、10kgを1300円で1000kmも運んでくれる。 • 石油エネルギーがいかに安価か・・・ 	<p>マラウイで感じたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> • 行動範囲は限られるが、歩くことは人間の生活の基本。 • 先進国は安価な石油エネルギーの上に構築されている都市社会の不安定性を再認識。 • 経済問題は即座後問題。農業を主に人間の働きで達成される小国に尊敬の念を禁じ得ない。

■講演「国際理解について」

西表朝顔の話から援助について考える。

庭が殺風景だからと友人が、西表朝顔の苗を持ってきて植えてくれた。

聞くと手入れの必要ない花期の長いものという。植える場所を見繕い、手際よく植えてくれた友人の労に感謝しながら月日が過ぎた。苗はみるみる生長し、見事な蕾を幾つもつけた。直径15センチ程もあろうかという大輪の藍色の花を幾つも咲かせて喜ばせてくれた。

近所の評判も良く、苗を分けてもらえないかという人も居た。朝顔というには太くたくましい茎で、紅葉の頃にも葉はあおおとして、いつまでも花を咲かせてくれた。蔓はぐんぐん伸びて、庭の木々を覆う程の勢いだ。冬の間も生き活きとして枯れることはなかった。

西表島とは日本再西端にして亜熱帯気候の島で、本土とは植物の生態は異なる。西表朝顔は年中咲いている植物だ。ここでも長い期間に渡って目を楽ませてくれた西表朝顔はますます大きくなり、庭で一番高い木がその頂上に花を咲かせているように見えた。

その花が次第に恐ろしいものに見え始めた。花は木陰にひっそりとは咲かない。その青い花は、一番表面で咲き誇り、その内側ではそれまで殺風景とはいわれながらも短い花期と香りで季節を教えてくれた木々が枯れていった。2年経ち3年目には庭は壊滅的な状態に陥っていた。

意を決し、西表朝顔を除去することにした。その根は深く、蔓の茎もターゲットを絞め殺すかのように入り込んでいた。庭木の70%近くをも枯らせており、被害という言い方からすれば甚大なものだった。

一方、西表朝顔それ自身にもそれを持ってきてくれた友人にも他意はない。

隣人として他国(途上国)に「良いと思われるものを」、近代化のお裾分けとして差し上げる。

果たしてこれが正しいかどうかはまことに難しい問題である。この西表朝顔の話はマラウイ大使公邸の夕食会の席上で、大使およびJICAの所長に申し上げた話である。

DNAが生命の設計図であることがわかり、その系図を統計的に扱うことができるようになった。その結果、人類は東アフリカのある地域から世界各地に広がっていったと言って良いそうである。白人も黄色人種もそして、原型としての黒人もすべて共通の祖先から受け継がれたDNAの痕跡を持ち続けている。遺伝学的には白人が日焼けして黒人になったのではなさそうである。原人の集団から何がしかの理由で飛び出して行ったその人こそ、人類の共通の祖先だという。それなら、世界中の人々は皆兄弟であり家族であるという美しいが故に感情的である言葉が、情報に裏打ちされて真実として受け入れられるということになる。国際協力については色々な考えや解釈があり、それはいちいちごもっともなものではあるが、人類はたったひと家族を祖先に持つ大家族であるという程に、単純で説得力のある動機はないではないか。家族を助けるのは当たり前だ。その先祖元が今、困っている。手を差し伸べようではないか。

困っているのと不幸なのは・・・違うと思う。

幸せとは何か

国際理解教育は最初と最後に同じ疑問を持つことになる。

幸せとは何か。幸せをもたらすための手助けをしたい。より幸せだと思われる我々は、より不幸だと思われる彼らに手助けをする。その判断のよりどころは、便利か不便かではないか。便利なら幸せ、不便ならかわいそうであり不幸である。この単純にして明快で納得させやすい論理で動いている。

洗濯機がなく手洗いで衣類を洗う人たちの時間と労力と、洗濯機を使う人たちの時間と労力を単純比較するわけである。実に説得力がある。洗濯機を持っている人は幸せで、持っていない人は不幸。そこには、かけがえがないとか、家族のために自分ができることを精一杯やることへの誇りとか賞賛という概念はない。効率がすべてである。確かに、延々と続く単純作業にしあわせを見いだすということは、難しい。衣類ごとに洗い方を加減したり、弱っているところを見つけたり、思わぬ所が汚れているのをみつけて、何かあったのではないかと察したり。そのようなことは他の機会でも分かる・・・？

自分も単純作業は大嫌いだし、人間として生まれてきたのに機械にもできることをワザワザありがたがってやることもないとも思う。しかし、そうやって今の日本の問題は派生してきたのではないか。

皆が皆、スポットライトを当ててくれ、私の私らしい輝いている時間はこれ。単純作業などに使う時間はない。そうやって、便利・効率の名の下に小さなことを見逃し、気がついたら幸せを見失っている人が大勢。日本の自殺者の多いことと幸せの概念の問題は無関係ではあり得ない。大事件が人々を不幸に落とし入れているわけでは必ずしもない。小さなことの積み重ねでこのような事態になったのではないか。もし、不便が不幸なら100年前の人は皆不幸。そして、今も、100年後からすれば不幸な生活をしているはずだ。つまり、いつの時代も不幸だということになる。利便性と「しあわせ」を別に考えようではないか。

生徒の反応

「面白かった。新しい切り口の情報で新鮮だった」

「自分が思っていたアフリカとずいぶん違い、行ってみたいと思った。」

「青年海外協力隊に応募してみたいと思った」

「上から目線で援助を理解していた気がする。自分の目で見てみたい」

生徒は身じろぎもせず話に聞き入り、自分たちの持つイメージや情報と生の情報の違いについて新鮮さを持って感じたようだ。

<所感>

民族・部族と国境の関係は地図を見れば一目瞭然だが、果たして植民地主義の国々はそのあたりをわかって今の援助などの関係が続けているのだろうか。他国の教科書の中身を調べてそのあたりの意識を調べ、生徒に伝えていきたい。

全体を通して成果と課題

教職員・保護者・そして多くの生徒たちは生の情報に触れ、自分が今まで持っていた情報とのバランスの乱れに驚きを感じたようである。ただ、こちらから与えた情報も同じようにフィルターを通したものであることを理解して欲しい。とかく聴衆は、自分に近い感覚を持った人の話や、新鮮で斬新な方を真実と取る傾向があるので、同じような危険性をはらんでいることを情報リテラシーとして理解して欲しい。教員の立場であれば特に伝えたことをそのまま真実であるかのように受けとられる。

「不便」であることは理解しやすいが、「かわいそう」そして「不幸」と短絡的に結び付けることに抵抗を感じる。写真や映像については情報リテラシーのもつ問題を意識しないと誰のための国際理解であり協力であるのかが分かりにくくなってしまう。広く理解の範囲を広げることは大切だが、深く理解することとのバランスを重視していかないと、本当の意味での国際協力にはなりにくい。一人を援助することが、どこからどこまでの範囲を意味するのかを把握して声をかけないと、責任の欠如したものになりかねない。笑顔で過ごすためには余裕も必要。それをどこまで理解できるか、どこまで許容できるかがポイントだろうと思う。フェイス・ツー・フェイスの人を人として支えることのできる援助のために努力したいと思う。

参考資料

【映像資料】

- ・DVD「ガンジー」、「マザーテレサ」



「マラウイの現状について」宗教関係の講演会



「他者のための人間という建学の精神について、マラウイ体験をもとに保護者にも説明

国際理解について

情報リテラシーと国際理解

写真の印象

- 写真から色々な情報を引き出しましょう。
- そのことについて考えましょう。
- 自分ができることを探しましょう。
- 行動しましょう。

説明

- マラウイは世界最貧国のひとつ
- 内陸国で輸入に頼る
- 農業以外の産業が乏しい
- 平均寿命は30歳代と言われている
- 深刻なエイズやマラリア
- 初等教育は無償だがやめる子が多い
- きびしい経済発展



写真からわかること

- 貧しい
- 難民？
- 元気がない
- 学校に行けない
- 服がない
-

明日への希望のないまま座り込む難民

地面に座って食料の配給を待つ難民

立ち入り禁止のワイヤーと難民

現地での情報

- 自給自足が可能で、飢える人は少ない。
- 農業はここ数年うまくいっている。
- 人々は質素で温和。
- 洗濯・着替えに頓着しない部族がいる。
- 世界的な不況の影響を受けにくい。
- エイズはすぐに死ぬわけではない。

もう一度写真を見てみよう

- 上から目線で「かわいそう」!
- 状況理解と情報理解。
- 共に居ないとわからないこと。
- 「かわいそう」は不幸か?
- 不便を不幸と混同していないか?
- 「幸せを与える」ことができるのか?

- 着替える習慣がない部族
- 寒ければ重ね着をする

祭りの踊りを待つ子供たち「早く始まらないかなー、ずーっと待っているのに」

この線から出てはいけません!

国際協力について

- 正しい情報とは何かについての吟味が必要。
- 共にいる (accompany) ことの重要性
- 問題解決までやってしまうのは...?
- 問題を社会化し変革を促す (advocate)